



濁度計 DTS-12

長期に及ぶ降雨や集中豪雨、防災の観点から、河川の濁度観測が重要視されています。多項目計測機にある濁度センサーとは違い、計測する範囲が広い
ため安定したデータを得ることが可能です。特に降雨時の粒度分布が一定でない
高濁度時にその違いを実感できます。従来の濁度計測で一般的に行われていた
「濁度平均値」では、得ることの出来なかった様々な情報を、DTS-12が提供します。

センサー仕様	濁度計 DTS-12
計測方式【濁度】	赤外散乱光方式
計測方式【水温】	サーミスタ電極法
有効光路長	3.8mm
計測波長	880nm(波長フィルター) 太陽光補正機能
機器動作電圧範囲	9.6V~16.0V
機器動作電流	(25℃標準時) スタンバイ時 0.35mA 動作中 50mA ワイパー稼働中 100mA
データ出力	SDI-12 version1.1
測定範囲	0~1,600NTU -5~50℃
測定分解能	0.01NTU 0.1℃
測定精度	±2%(0-499) ±4%(500-1600)
寸法	304.8×50.8mmφ 604g
測定項目	100データ中(5秒間) 中間値、分散値、最大、最小、平均、BES、水温
ロガー機能	最少記録期間:1分(変更可能) 記録媒体:SDカード(CSV)
通信機能	移動体通信網を介したクラウドサービスへの自動データアップロード

ポイント
1

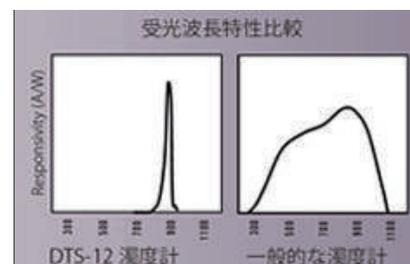
1回計測で100データを取得

1回濁度を計測するとき、5秒間で100データ(=20Hz)取得します。従来の濁度計と違い、この間の濁度を自動計算計測結果は100データ中の中間値を、また同時に分散値(=ばらつき)を計測するため、粒度の違いによる濁度計測誤差を排除しました。初期降雨を求めるユーザーには待望の濁度センサーです。

ポイント
2

受光波長特性が性能の鍵

河川濁度計測で最も重要なものとして、受光波長特性があげられます。河川など、浅い水深下でS.S.を正確に計測するとき、波長がブロードであることは、濁度、S.S.の相関が全く取れない計測結果になります。880nmの受光フィルターを通過した散乱光濁度計測は、太陽光の影響を排除し、限りなく精度高い計測が可能です。DTS-12の波長特性のすばらしさをご確認下さい。

ポイント
3

光学系ドリフトがない長期観測モデル

1年間に2%以内と、驚異の光学系安定度を実現した長期計測安定。校正作業を伴わずメンテナンスが容易です。